秋山図

芥川龍之介

「――黄大癡（こうたいち）といえば、大癡の秋山図（しゅうざんず）をご覧（らん）になったことがありますか？」
ある秋の夜（よ）、甌香閣（おうこうかく）を訪（たず）ねた王石谷（おうせきこく）は、主人の惲南田（うんなんでん）と茶を啜（すす）りながら、話のついでにこんな問を発した。

「いや、見たことはありません。あなたはご覧になったのですか？」
大癡老人黄公望（こうこうぼう）は、梅道人（ばいどうじん）や黄鶴山樵（こうかくさんしょう）とともに、元朝（げんちょう）の画（え）の神手（しんしゅ）である。惲南田はこう言いながら、かつて見た沙磧図（させきず）や富春巻（ふうしゅんかん）が、髣髴（ほうふつ）と眼底に浮ぶような気がした。

「さあ、それが見たと言って好いか、見ないと言って好いか、不思議なことになっているのですが、——」

「見たと言って好いか、見ないと言って好いか、——」

惲南田は訝しそうに、王石谷の顔へ眼をやった。

「模本でもご覧になったのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。とにかく真蹟は見たのですが、——それも私ばかりではありません。この秋山図のことについては、煙客先生（王時敏）や廉州先生（王鑑）も、それぞれ因縁がおありなのです」

王石谷はまた茶を啜った後、考深そうに微笑した。

「ご退屈でなければ話しましょうか？」

「どうぞ」
惲南田は銅檠の火を掻き立ててから、慇懃に客を促した。

＊　＊　＊

元宰先生（董其昌）が在世中のことです。ある年の秋先生は、煙客翁と画論をしている内に、ふと翁に、黄一峯の秋山図を見たかと尋ねました。翁はご承知のとおり画事の上では、大癡を宗としていた人です。ですから大癡の画という画はいやしくも人間にある限り、

看尽(みつく)したと言ってもかまいません。が、その秋山図という画ばかりは、ついに見たことがないのです。

「いや、見るどころか、名を聞いたこともないくらいです」

煙客翁はそう答えながら、妙に恥(はずか)しいような気がしたそうです。

「では機会のあり次第、ぜひ一度は見ておおきなさい。夏山図(かざんず)や浮嵐図(ふらんず)に比べると、また一段と出色(しゅっしょく)の作です。おそらくは大癡(たいち)老人の諸本の中でも、白眉(はくび)ではないかと思いますよ」

「そんな傑作ですか？　それはぜひ見たいものですが、

いったい誰が持っているのです？」

「潤州の張氏の家にあるのです。金山寺へでも行った時に、門を叩いてご覧なさい。私が紹介状を書いて上げます」

煙客翁は先生の手簡を貰うと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろそういう妙画を蔵している家ですから、そこへ行けば黄一峯の外にも、まだいろいろ歴代の墨妙を見ることができるに違いない。——こう思った煙客翁は、もう一刻も西園の書房に、じっとしていることはできないような、落着かない気もちになっていたのです。

ところが潤州へ来て観(み)ると、楽みにしていた張氏の家というのは、なるほど構えは広そうですが、いかにも荒れ果てているのです。墻(かき)には蔦(つた)が絡(から)んでいるし、庭には草が茂っている。その中に鶏(にわとり)や家鴨(あひる)などが、客の来たのを珍しそうに眺めているという始末ですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名画があるのだろうかと、一時は元宰先生(げんさいせんせい)の言葉が疑いたくなったくらいでした。しかしわざわざ尋ねて来ながら、刺(し)も通ぜずに帰るのは、もちろん本望(ほんもう)ではありません。そこで取次ぎに出て来た小厮(しょうし)に、ともかくも黄一峯の秋山図を拝見したいという、遠来の意を伝えた後(のち)、思白(しはく)先

生が書いてくれた紹介状を渡しました。
すると間もなく煙客翁は、庁堂（ちょうどう）へ案内されました。ここも紫檀（したん）の椅子机（いす）が、清らかに並べてありながら、冷たい埃（ほこり）の臭（にお）いがする、――やはり荒廃（こうはい）の気が鋪甎（ほせん）の上に、漂っているとでも言いそうなのです。しかし幸い出て来た主人は、病弱らしい顔はしていても、人がらの悪い人ではありません。いや、むしろその蒼白（あおじろ）い顔や華奢（きゃしゃ）な手の恰好なぞに、貴族らしい品格が見えるような人物なのです。翁はこの主人とひととおり、初対面の挨拶（あいさつ）をすませると、早速名高い黄一峯を見せていただきたいと言いだしました。何でも翁の話では、

その名画がどういう訳か、今の内に急いで見ておかないと、霧のように消えてでもしまいそうな、迷信じみた気もちがしたのだそうです。

主人はすぐに快諾しました。そうしてその庁堂の素壁へ、一幀の画幅を懸けさせました。

「これがお望みの秋山図です」

煙客翁はその画を一目見ると、思わず驚嘆の声を洩らしました。

画は青緑の設色です。渓の水が委蛇と流れたところに、村落や小橋が散在している、——その上に起した主峯の腹には、ゆうゆうとした秋の雲が、蛤粉の

濃淡を重ねています。山は高房山(こうぼうざん)の横点(おうてん)を重ねた、新雨(しんう)を経たような翠黛(すいたい)ですが、それがまた硃(しゅ)を点じた、所々(しょしょ)の叢林(そうりん)の紅葉(こうよう)と映発している美しさは、ほとんど何と形容して好(い)いか、言葉の着けようさえありません。こういうとただ華麗(かれい)な画のようですが、布置(ふち)も雄大を尽していれば、筆墨(ひつぼく)も渾厚(こんこう)を極(きわ)めている、――いわば爛然(らんぜん)とした色彩の中(うち)に、空霊澹蕩(くうれいたんとう)の古趣が自(おのずか)ら漲(みなぎ)っているような画なのです。

　煙客翁はまるで放心したように、いつまでもこの画を見入っていました。が、画は見ていれば見ているほど、ますます神妙を加えて行きます。

「いかがです？　お気に入りましたか？」

主人は微笑を含みながら、斜(ななめ)に翁の顔を眺めました。

「神品(しんぴん)です。元宰先生(げんさいせんせい)の絶賞は、たとい及ばないことがあっても、過ぎているとは言われません。実際この図に比べれば、私(わたし)が今までに見た諸名本は、ことごとく下風(かふう)にあるくらいです」

煙客翁はこういう間(あいだ)でも、秋山図(しゅうざんず)から眼を放しませんでした。

「そうですか？　ほんとうにそんな傑作ですか？」

翁は思わず主人のほうへ、驚いた眼を転じました。

「なぜまたそれがご不審なのです？」

「いや、別に不審という訳ではないのですが、実は、――」

主人はほとんど処子（しょし）のように、当惑そうな顔を赤めました。が、やっと寂しい微笑を洩すと、おずおず壁上の名画を見ながら、こう言葉を続けるのです。

「実はあの画を眺めるたびに、私（わたし）は何だか眼を明いたまま、夢でも見ているような気がするのです。なるほど秋山（しゅうざん）は美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？　私以外の人間には、平凡な画図（がと）に過ぎないのではないか？――なぜかそういう疑いが、始終私を悩ませるのです。これは私の気の迷

いか、あるいはあの画が世の中にあるには、あまり美し過ぎるからか、どちらが原因だかわかりません。が、とにかく妙な気がしますから、ついあなたのご賞讃にも、念を押すようなことになったのです」

しかしその時の煙客翁は、こういう主人の弁解にも、格別心は止めなかったそうです。それは何も秋山図に、見惚(みと)れていたばかりではありません。翁には主人が徹頭徹尾(てっとうてつび)、鑑識(かんしき)に疎(うと)いのを隠したさに、胡乱(うろん)の言を並べるとしか、受け取れなかったからなのです。

翁はそれからしばらくの後(のち)、この廃宅同様な張氏(ちょうし)の家を辞しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覚めるような秋山図(しゅうざんず)です。実際大癡(たいち)の法燈(ほうとう)を継いだ煙客翁(えんかくおう)の身になって見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたいと思ったでしょう。のみならず翁は蒐集家(しゅうしゅうか)です。しかし家蔵の墨妙の中(うち)でも、黄金(おうごん)二十鎰(いつ)に換えたという、李営丘(りえいきゅう)の山陰泛雪図(さんいんはんせつず)でさえ、秋山図の神趣に比べると、遜色(そんしょく)のあるのを免(まぬか)れません。ですから翁は蒐集家としても、この稀代(きだい)の黄一峯(こういっぽう)が欲しくてたまらなくなったのです。

そこで潤州(じゅんしゅう)にいる間(あいだ)に、翁は人を張氏に遣(つか)わして、秋山図を譲ってもらいたいと、何度も交渉してみまし

た。が、張氏はどうしても、翁の相談に応じません。あの顔色の蒼白い主人は、使に立ったものの話によると、「それほどこの画がお気に入ったのなら、喜んで先生にお貸し申そう。しかし手離すことだけは、ごめん蒙りたい」と言ったそうです。それがまた気を負った煙客翁には、多少癇にも障りました。何、今貸してもらわなくても、いつかはきっと手に入れてみせる。――翁はそう心に期しながら、とうとう秋山図を残したなり、潤州を去ることになりました。

それからまた一年ばかりの後、煙客翁は潤州へ来たついでに、張氏の家を訪れてみました。すると墻に絡

んだ蔦（つた）や庭に茂った草の色は、以前とさらに変りません。が、取次ぎの小厮（しょうし）に聞けば、主人は不在だということです。翁は主人に会わないにしろ、もう一度あの秋山図を見せてもらうように頼みました。しかし何度頼んでみても、小厮は主人の留守（るす）を楯（たて）に、頑（がん）として奥へ通しません。いや、しまいには門を鎖（とざ）したまま、返事さえろくにしないのです。そこで翁はやむを得ず、この荒れ果てた家のどこかに、蔵している名画を想いながら、惆悵（ちゅうちょう）と独（ひと）り帰って来ました。

ところがその後元宰（ごげんさい）先生に会うと、先生は翁に張氏（ちょうし）の家には、大癡の秋山図があるばかりか、沈石田（しんせきでん）の

雨夜止宿図や自寿図のような傑作も、残っているということを告げました。

「前にお話するのを忘れたが、この二つは秋山図同様、※苑［＃「糸＋貴」、174-下-19］の奇観とも言うべき作です。もう一度私が手紙を書くから、ぜひこれも見ておきなさい」

煙客翁はすぐに張氏の家へ、急の使を立てました。使は元宰先生の手札の外にも、それらの名画を購うべき嚢金を授けられていたのです。しかし張氏は前のとおり、どうしても黄一峯だけは、手離すことを肯じません。翁はついに秋山図には意を絶つより外はなく

なりました。

＊　＊　＊

王石谷(おうせきこく)はちょいと口を噤(つぐ)んだ。

「これまでは私(わたし)が煙客先生(えんかくせんせい)から、聞かせられた話なのです」

「では煙客先生だけは、たしかに秋山図を見られたのですか？」

惲南田(うんなんでん)は鬚(ひげ)を撫(ぶ)しながら、念を押すように王石谷を見た。

「先生は見たと言われるのです。が、たしかに見られたのかどうか、それは誰にもわかりません」

「しかしお話の容子では、――」

「まあ先をお聴きください。しまいまでお聴きくだされば、また自ら私とは違ったお考が出るかもしれません」

王石谷は今度は茶も啜らずに、娓々と話を続けだした。

＊　＊　＊

煙客翁が私にこの話を聴かせたのは、始めて秋山図を見た時から、すでに五十年近い星霜を経過した後だったのです。その時は元宰先生も、とうに物故していましたし、張氏の家でもいつの間にか、三度まで代が変っていました。ですからあの秋山図も、今は誰の家に蔵されているか、いや、未に亀玉の毀れもないか、それさえ我々にはわかりません。煙客翁は手にとるように、秋山図の霊妙を話してから、残念そうにこう言ったものです。

「あの黄一峯は公孫大嬢の剣器のようなものでしたよ。筆墨はあっても、筆墨は見えない。ただ何とも言

えない神気(しんき)が、ただちに心に迫って来るのです。――ちょうど龍翔(りょうしょう)の看(かん)はあっても、人や剣(つるぎ)が我々に見えないのと同じことですよ」

それから一月(ひとつき)ばかりの後(のち)、そろそろ春風(しゅんぷう)が動きだしたのを潮(しお)に、私は独り南方へ、旅をすることになりました。そこで翁(おう)にその話をすると、

「ではちょうど好(い)い機会だから、秋山(しゅうざん)を尋ねてご覧(らん)なさい。あれがもう一度世に出れば、画苑(がえん)の慶事(けいじ)ですよ」と言うのです。

私ももちろん望むところですから、早速翁を煩(わずら)わせて、手紙を一本書いてもらいました。が、さて遊歴(ゆうれき)

の途（と）に上ってみると、何かと行く所も多いものですから、容易に潤州（じゅんしゅう）の張氏の家を訪れる暇（ひま）がありません。私は翁の書を袖（そで）にしたなり、とうとう子規（ほととぎす）が啼（な）くようになるまで、秋山（しゅうざん）を尋ねずにしまいました。

その内にふと耳にはいったのは、貴戚（きせき）の王氏（おうし）が秋山図を手に入れたという噂（うわさ）です。そういえば私（わたし）が遊歴中、煙客翁（えんかくおう）の書を見せた人には、王氏を知っているものも交（まじ）っていました。王氏はそういう人からでも、あの秋山図が、張氏（ちょうし）の家に蔵してあることを知ったのでしょう。何でも坊間（ぼうかん）の説によれば、張氏の孫は王氏（おうし）の使を受けると、伝家の彝鼎（いてい）や法書とともに、すぐさま

大癡(たいち)の秋山図を献じに来たとかいうことです。そうして王氏は喜びのあまり、張氏の孫を上座に招じて、家姫(かき)を出したり、音楽を奏したり、盛な饗宴(きょうえん)を催したあげく、千金を寿(じゅ)にしたとかいうことです。私はほとんど雀躍(じゃくやく)しました。滄桑五十載(そうそうごじっさい)を閲(けみ)した後(のち)でも、秋山図はやはり無事だったのです。のみならず私も面識がある、王氏の手中に入ったのです。昔は煙客翁がいくら苦心をしても、この図を再び看(み)ることは、鬼神(きじん)が悪(にく)むのかと思うくらい、ことごとく失敗に終りました。が、今は王氏の焦慮(しょうりょ)も待たず、自然とこの図が我々の前へ、蜃楼(しんろう)のように現れたのです。これこそ実際天縁

が、熟したと言う外はありません。私は取る物も取りあえず、金閶にある王氏の第宅へ、秋山を見に出かけて行きました。

今でもはっきり覚えていますが、それは王氏の庭の牡丹が、玉欄の外に咲き誇った、風のない初夏の午過ぎです。私は王氏の顔を見ると、揖もすますかすまさない内に、思わず笑いだしてしまいました。

「もう秋山図はこちらの物です。煙客先生もあの図では、ずいぶん苦労をされたものですが、今度こそはご安心なさるでしょう。そう思うだけでも愉快です」

王氏も得意満面でした。

「今日(きょう)は煙客先生や廉州(れんしゅう)先生も来られるはずです。が、まあ、お出でになった順に、あなたから見てもらいましょう」

王氏は早速かたわらの壁に、あの秋山図を懸(か)けさせました。水に臨んだ紅葉(こうよう)の村、谷を埋(うず)めている白雲(はくうん)の群(むれ)、それから遠近(おちこち)に側立(そばだ)った、屏風(びょうぶ)のような数峯の青(せい)、——たちまち私の眼の前には、大癡老人が造りだした、天地よりもさらに霊妙な小天地が浮び上ったのです。私は胸を躍(おど)らせながら、じっと壁上の画を眺めました。

この雲煙邱壑(うんえんきゅうがく)は、紛(まぎ)れもない黄一峯(こういっぽう)です、癡翁(ちおう)を除いては何人(なんぴと)も、これほど皴点(しゅんてん)を加えながら、しかも墨

を活(い)かすことは——これほど設色(せっしょく)を重くしながら、しかも筆が隠れないことは、できないのに違いありません。しかし——しかしこの秋山図は、昔一たび煙客翁が張氏の家に見たという図と、たしかに別な黄一峯(こういっぽう)です。そうしてその秋山図(しゅうざんず)よりも、おそらくは下位にある黄一峯です。

私(わたし)の周囲には王氏を始め、座にい合せた食客(しょっかく)たちが、私の顔色(かおいろ)を窺(うかが)っていました。ですから私は失望の色が、寸分(すんぶん)も顔へ露(あら)われないように、気を使う必要があったのです。が、いくら努めてみても、どこか不服な表情が、我知らず外へ出たのでしょう。王氏はし

ばらくたってから、心配そうに私へ声をかけました。

「どうです？」

私は言下に答えました。

「神品です。なるほどこれでは煙客先生が、驚倒されたのも不思議はありません」

王氏はやや顔色を直しました。が、それでもまだ眉の間には、いくぶんか私の賞讃に、不満らしい気色が見えたものです。

そこへちょうど来合せたのは、私に秋山の神趣を説いた、あの煙客先生です。翁は王氏に会釈をする間も、嬉しそうな微笑を浮べていました。

「五十年前に秋山図を見たのは、荒れ果てた張氏の家でしたが、今日はまたこういう富貴のお宅に、再びこの図とめぐり合いました。まことに意外な因縁です」

煙客翁はこう言いながら、壁上の大癡を仰ぎ見ました。この秋山がかつて翁の見た秋山かどうか、それはもちろん誰よりも翁自身が明らかに知っているはずです。ですから私も王氏同様、翁がこの図を眺める容子に、注意深い眼を注いでいました。すると果然翁の顔も、みるみる曇ったではありませんか。

しばらく沈黙が続いた後、王氏はいよいよ不安そうに、おずおず翁へ声をかけました。

「どうです？　今も石谷先生は、たいそう褒めてくれましたが、——」

私は正直な煙客翁が、有体な返事をしはしないかと、内心冷や冷やしていました。しかし王氏を失望させるのは、さすがに翁も気の毒だったのでしょう。翁は秋山を見終ると、叮嚀に王氏へ答えました。

「これがお手にはいったのは、あなたのご運が好いのです。ご家蔵の諸宝もこの後は、一段と光彩を添えることでしょう」

しかし王氏はこの言葉を聞いても、やはり顔の憂色が、ますます深くなるばかりです。

その時もし廉州(れんしゅう)先生が、遅(おく)れ馳(ば)せにでも来なかったなら、我々はさらに気まずい思いをさせられたに違いありません。しかし先生は幸いにも、煙客翁の賞讃が渋りがちになった時、快活に一座へ加わりました。

「これがお話の秋山図ですか？」

先生は無造作(むぞうさ)な挨拶(あいさつ)をしてから、黄一峯(こういっぽう)の画(え)に対しました。そうしてしばらくは黙然(もくねん)と、口髭(くちひげ)ばかり噛(か)んでいました。

「煙客先生(えんかくせんせい)は五十年前(ぜん)にも、一度この図をご覧になったそうです」

王氏はいっそう気づかわしそうに、こう説明を加え

ました。廉州先生はまだ翁から、一度も秋山の神逸を聞かされたことがなかったのです。
「どうでしょう？　あなたのご鑑裁は」
先生は歎息を洩らしたぎり、不相変画を眺めていました。
「ご遠慮のないところを伺いたいのですが、――」
王氏は無理に微笑しながら、再び先生を促しました。
「これですか？　これは――」
廉州先生はまた口を噤みました。
「これは？」
「これは癡翁第一の名作でしょう。――この雲煙の濃

淡をご覧なさい。元気淋漓（りんり）じゃありませんか。林木なその設色（せっしょく）も、まさに天造（てんぞう）とも称すべきものです。あすこに遠峯が一つ見えましょう。全体の布局（ふきょく）があのために、どのくらい活（い）きているかわかりません」

今まで黙っていた廉州先生は、王氏のほうを顧（かえり）みると、いちいち画の佳所（かしょ）を指さしながら、盛（さかん）に感歎の声を挙（あ）げ始めました。その言葉とともに王氏の顔が、だんだん晴れやかになりだしたのは、申し上げるまでもありますまい。

私はその間（あいだ）に煙客翁と、ひそかに顔を見合せました。

「先生、これがあの秋山図ですか？」

私が小声にこう言うと、煙客翁は頭を振りながら、妙な瞬(まばた)きを一つしました。

「まるで万事が夢のようです。ことによるとあの張家(ちょうけ)の主人は、狐仙(こせん)か何かだったかもしれませんよ」

＊　＊　＊

「秋山図の話はこれだけです」

王石谷(おうせきこく)は語り終ると、おもむろに一碗の茶を啜(すす)った。

「なるほど、不思議な話です」

惲南田(うんなんでん)は、さっきから銅檠(どうけい)の焔(ほのお)を眺めていた。

「その後（ご）王氏も熱心に、いろいろ尋（たず）ねてみたそうですが、やはり癡翁の秋山図と言えば、あれ以外に張氏も知らなかったそうです。ですから昔煙客先生が見られたという秋山図は、今でもどこかに隠れているか、あるいはそれが先生の記憶の間違いに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山図を見に行かれたことが、全体幻（まぼろし）でもありますまいし、――」

「しかし煙客先生（えんかくせんせい）の心の中（うち）には、その怪しい秋山図が、はっきり残っているのでしょう。それからあなたの心の中（なか）にも、――」

「山石の青緑だの紅葉の硃（しゅ）の色だのは、今でもありあり見えるようです」

「では秋山図がないにしても、憾（うら）むところはないではありませんか？」

惲王（うんおう）の両大家は、掌（たなごころ）を拊（う）って一笑した。

底本：「日本文学全集28芥川龍之介集」集英社
１９７２（昭和47）年９月８日発行
入力：j.utiyama
校正：もりみつじゅんじ
１９９９年５月15日公開
２００９年９月16日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。